『告白録』第十巻における記憶・忘却論についてのポール・リクールの解釈

久米　博

Ⅰ　リクール哲学におけるアウグスティヌスの位置

アウグスティヌスはリクール哲学において、プラトン、アリストテレスとならんで、もっとも参照されることの多い古代哲学者である。アウグスティヌスは、リクールの哲学的著作だけでなく、宗教的著作にも登場する。その主なものを以下に列挙する。

(1)　悪と罪を扱った論文。「原罪――意味の問題」「悪――哲学と神学への挑戦」など多数。

(2)　『聖書を考える』旧約学者アンドレ・ラコックとの共著。アウグスティヌスの創造論などを扱う。

(3)　『時間と物語Ⅰ』では『告白録』第十一巻の時間論を主題的に論じる。三重の現在論から物語性を、アリストテレスの『詩学』から時間性を取り出して、時間と物語を連結し、心理的時間と物理的時間のアポリアを、物語の詩学によって解決しようとする。

(4)　『記憶・歴史・忘却』では『告白録』第十巻を取り上げ、記憶力の現象学の観点から記憶を、歴史的条件の解釈学の観点から忘却を論じる。

Ⅱ　記憶力の現象学の観点から

『告白録』第十巻で展開される記憶の記述と分析を、リクールはまず現象学的観点から論じる。

『記憶・歴史・忘却』の第一部第三章「個人的記憶と集合的記憶」で記憶に対する「内的視線の伝統」を代表する者としてアウグスティヌス、ロック、フッサールを取り上げる。その章のテーマは記憶の主観性と、個人的記憶と集合的記憶の競合である。リクールはアウグスティヌスの記憶論の本質は内面性にあるとする。「私の思い出は、あなたの思い出ではない」。記憶は私有性の典型である。記憶は私の印象の過去である。そこで記憶は私の人格の時間的連続性、自己同一性を確保してくれる。現在を経由して過去から未来へ、未来から過去へと、記憶は時間の進む方向と結びつく。要するに、人は何かを思い出しながら、自己を思い出す。以上の特徴のうえに記憶の内的視線の伝統はつくりあげられ、リクールはアウグスティヌスをその伝統の体現者であり、創始者であるとする。この発見＝創造の新しさは、ポリスと個人というギリシア的問題系と対比するとき際立つ。しかしアウグスティヌスは内面的人間は知っていても、記憶と人格的自己同一性の等式を知らない。それを発見したのはジョン・ロックである。〔王子の魂を靴直し職人の身体に移植したらどうなるか〕ロックも「主体」という語の超越論的意味を知らない。「主体」はカントが創始し、それをフッサールの超越論的哲学にまで遺贈した。アウグスティヌスがアリストテレスの物理的時間を排して、魂の内的時間に集中したように、フッサールも客観的時間を排去して、「意識の流れの内的時間」を捉えようとし、時間の流れを超越論的意識の自己構成とする。フッサールは鳴り響く音をモデルに「過去把持」の概念をつくりあげるが、その時間経験は記憶である。フッサールにおいて内的視線の学派は頂点に達するが、同時に集合的記憶への道は閉ざされた。

「自己を想起する人間」

アウグスティヌスは回心の経験を土台にして内面性を創出した。彼が記述するのは意識や自己でも主体でもなく、自己を想起する人間である。内面性の探求を離れて、記憶力の現象学はない。アウグスティヌスの力は記憶を時間分析に結びつけたところにあるとして、リクールは想起の努

力を第十一巻の時間の探求に関連づけて理解する。「主よ、私はその問題で骨を折り、自分自身の問題で骨を折っています。私は私自身にとって困難と汗の大地となりました。そうです、われわれが今測ろうとしているのは、もはや天界ではなく、星と星との間の距離でもなく、精神です。記憶するのは私です（Ego sum,qui memini, ego animus）」（X, 16, 21）。

神の探求はまず記憶のうちでなされる。記憶は「広大な宮殿」「奥の院」「預けられ」「貯蔵され」「倉庫」「宝庫」といった場所的隠喩で表わされる。記憶はそこに貯えられ、そこからいつでも引き出せるようになっている。記憶の力はまずその豊かさによって称讃され、次にコギトに匹敵する働きによって称讃される。さらに事物の記憶と私自身の記憶は一致し、そこにおいて私は自分に出会い、自分のしたことを思い出す。「私は自分が思い出したことを思い出す」（X,13,20）。要するに「精神とは記憶そのものであります」（X, 14, 21）。

「身近な人々の記憶」

アウグスティヌスの自己探求、神の探求は記憶という精神世界の中でなされる。アウグスティヌスは時間測定の問題から内心の時間分析に入っていく。そうして見出された内的時間は、宇宙的時間、世界の時間と対立する。それは個人的記憶と集合的記憶の対立と並行しているのか。社会学者アルプヴァクスは「思い出すには他人が必要である」として、記憶を集団または社会に帰属させる。記憶の派生する順序は、自分の記憶からでなく、他者から受けた教示からであるとし、アルプヴァクスは記憶を三人称で示す。歴史学は集合的記憶の形でしか、記憶を歴史に取り入れられない。とすると個人的記憶から集合的記憶への道は閉ざされたままなのか。リクールは第二章第三節「回想の帰属する三つの主体――自我、集合体、身近な人々」でその道を探る。

イギリスの分析哲学者P・F・ストローソンは『個体と主語』で、心的述語や特殊な行動の述語は自分以外の他者にも賦与できるとする。同じことは記憶についても言えないか。プラトンは回想が誰にやって来るかを問わない。アリストテレスは想起の実行者について問わない。記憶現象は誰にも賦与されることができ、その意味は理解されうる。文学は現象を一人称、二人称、三人称で、人物に賦与する。他者への賦与は自己への賦与と共外延的である。「感情移

入」、フッサールの「対化」(Paarung) もそれと無縁ではない。

このように記憶を、自己へ、集合体へ、そして身近な人々へ賦与することができるなら、身近な人々は、自己から集合体へ移行するための、中間の媒体とならないか。身近な人々とは、自己と一般人との中間に位置し、近くにいる、特権的な他者である。それは平等に評価しあい、私が存在するのを承認し、わたしも彼らの存在を承認する人たちである。リクールは『告白録』十巻に、その身近な人々の記述を見出す。「その行ないを、異邦人の心でなく、兄弟の心をもってやってほしい。〔……〕そのような人の心は、私を是とするときは、私を喜び、私を非とするときは、私を悲しみます。私はこのような人たちに、自分のあらいざらいを打ち明けましょう」(X, 4, 5-6)。

Ⅲ 「保留された忘却」の観点から

アウグスティヌスは幸福な記憶について語りながら、同時にそれを脅かす忘却について語る。「忘却の記憶」とは、アウグスティヌスのもっとも重要な問題提起である。記憶の貯蔵所は、その墓と隣り合わせ。彼は記憶の想起に、「忘却の想起」をつけ加える。それは完全な忘却を被いのけるためである。

「しかしわれわれが思い出すものを、われわれが保持しているのは、記憶によってであります。ところで忘却を思い出さなかったら、その忘却という名を聞いて、それが意味する現実を再認することはできないでしょう。ですから忘却を保持しているのは記憶なのです」(X, 16, 24)。記憶を失うのが忘却であるが、忘却を保持しているのも記憶である。失われた銀貨を見出すのは、それが失われたものと同一であると判断するときである。「その失われたものはたしかに視界から消えうせても、記憶はそれを憶えているのです」(X, 19, 27)。再認の現象は、それが完全な忘却ではないことを証明する。

この忘却の謎は、神を記憶の中に求めようとするとき、深刻な問題をひき起こす。「私は記憶と呼ばれる私の中のこの力を超えて行きます。甘美な光よ、私はあなたに到るために、私は記憶を超えて行きます。それはどこであなたを見いだすためでしょうか。〔……〕私があなたを見いだすのが記憶の外だとしたら、私はあなたの記憶がないから

です。ですから私があなたの記憶をもっていないとしたら、どうしてあなたを見いだすのでしょうか」(X, 17, 26)。ここに神忘却が姿を現わす、とリクールは記す。しかしこの問題について、彼はここではそれ以上論じない。彼が忘却の問題を再開するのは、『記憶・歴史・忘却』の第三部「歴史的条件」の第三章「忘却」においてである。

リクールは忘却の二つの形態を区別する。一つは記憶痕跡の消滅による完全な忘却であり、もう一つは忘却のポジティヴな形「保留された忘却」(oubli de réserve)である。それは潜在的な能力としての忘却である。忘れていたものをふと思い出す。その幸福をリクールは「小さな奇跡」と名づける。われわれが忘却の底から思い出すのは、それが残存し、存続していたからである。ベルクソンは『物質と記憶』で、忘却という言葉は使わないが、第二章「イマージュの再認」第三章「イマージュの残存」でまさにその問題を論じる。ベルクソンは記憶が「どこに」あるかの問いを、「いかにして」の問いに置き換え、記憶の保存を、「脳の側に」探求するのを斥け、「それ自身で保存される」記憶が、潜在状態から現働状態に移って再認が起こるとする。アウグスティヌスも知人の名を忘れてしまい、想起しようとする努力について、こう語る。「しかしその名が完全に心から抹消されているとしたら、たとえ教えられても、想起できないはずです。自分が忘れてしまったことだけでも憶えているかぎり、まだ完全に忘れさったわけではありません。もし完全に忘却したなら、失ったものを探すこともしないでしょう」(X, 19, 28)。

ベルクソンもアウグスティヌスもともに、埋もれていた記憶を再認する経験は、表象が潜在的に存続していたことを前提としている。探求すること、それは再発見することであり、再発見することは以前に学んだことの再認である。それは、真理は想起(anamnésis)であるというギリシアの思想に通じる。

リクールは想起作用で、先在した不在のものの現前という再認を、アウグスティヌスの『告白録』の一節で例証する。「おお真理よ、私はお前を再認するのが遅きに失した!」。じつは『告白録』(X, 27, 38)では、「古くて新しき美よ、遅かりしかな、お前を愛することのあまりに遅かりし」となっており、リクールはあえて美を真理と言い換えたのである。

そうすると神認識の問題はどうなるか。神の超越性は人

間の記憶の限界を超えながら、人間の精神に現前するのをけっして排除しない。「それゆえあなたを知るようになってからこのかた、あなたは私の記憶にとどまりたまい、あなたを想起し、あなたにおいて喜ぶとき、あなたをそこに見いだします」(X, 24, 35)。「もし私があなたを記憶していないとすれば、どうして今あなたを見いだすことができるでしょうか」(X, 17, 26)。しかしいつ神は私の記憶に宿ったのか。いつ、どこで私は神を知ったのか。「あなたを知るようになる以前に、すでに私の記憶のうちにおられたはずはありません。ではどこで見いだし、知るようになったのでしょうか。ほかならない〈私をこえて、あなたにおいて〉ではなかったでしょうか。けっして場所はありません」(X, 26, 37)。神についての原初の知は自己を超えた、記憶を超えた高みにある。それをリクールは「人の記憶を超えたもの」(l'immémorial),「起源の記憶」と呼ぶ。それは存在論的なもの、土台にあるものの忘却であり、忘却の彼方にある記憶である。こうした記憶と忘却の営みが、たとえ神の現前が知られず、忘れられていても、人間の精神に現前するのを可能にする。

Ⅳ 「保留された忘却」の概念の着想

「保留された忘却」の概念の着想を、リクールは直接アウグスティヌスから得たと言ってはいない。しかしイザベル・ボシェは『ポール・リクールの思想におけるアウグスティヌス』で、そこに直接間接にアウグスティヌスの影響があると見る。リクールは第三章「忘却」でハイデガー『存在と時間』§68の「想起は忘却にもとづいて可能になる」という観念を借用していることを認めている。しかしボシェはハイデガー自身がアウグスティヌスに負っていると見る。ジャン・グレーシュによるとハイデガーは一九二一年の夏学期に『告白録』第十巻について講義をし、そこで彼は一六章24—25節における記憶と忘却の関係に興味を示したという。しかも『存在と時間』§9では、そのテクストを引用して、Dasein の存在を構成する二つの存在論的謎を記述している。

またリクールはハンナ・アーレントを論じた論文「権力と暴力」で、「過去には属さない忘却」について語っている。アーレントは『アウグスティヌスにおける愛の概念』

で『告白録』第十巻における記憶分析を参照し、「起源の記憶」について語っている。

以上からハイデガー、アーレントを介してのリクールへのアウグスティヌスの影響を認めることができる、とボシェは結論する。

参考文献

アウグスティヌスを論じたポール・リクールの主な論文と著書

Le Mal.Un défi à la philosophie et à la théologie, Labor et Fides,1986.

《*Le péché originel*: étude de signification》, in *Le conflit des interprétations. Essais d'herméneutique*, Seuil, 1969.

Pau Ricoeur, André LaCocque, *Penser la Bible*, Seuil, 1998.

Temps et Récit, Seuil, t.1, 1983; t.3, 1985.

La mémoire, l'histoire, l'oubli, Seuil. 2000.

リクールのアウグスティヌス論についての研究書。

Isabelle Bochet, *Augustin dans la pensée de Paul Ricoeur*, Editions facultés jésuites de Paris, 2003.